

※「1 内容の整理」以降を現代語訳を参考にノートにまとめて提出せよ。

本文

およそ能登守教経の矢先に回る者こそなかりけれ。矢だねのあるほど射尽くして、今日を最後とや思はれけん、赤地の錦の直垂に、唐綾緘の鎧着て、いかものづくりの太刀抜き、白柄の大長刀の鞘をはずし、左右に持つてなぎ回り給ふに、面を合はする者ぞなき。多くの者ども討たれにけり。新中納言、使者を立てて、

「能登殿、いたう罪な作り給ひそ。さりとてよき敵か。」

とのたまひければ、さては大将軍に組めごさんなれと心得て、打物茎短に取つて、源氏の舟に乗り移り乗り移り、をめき叫んで攻め戦ふ。判官を見知り給はねば、物の具のよき武者をば判官かと目をかけて、馳せ回る。判官も先に心得て、表に立つやうにはしけれども、とかく違ひて能登殿には組まれず。されどもいかがりけん、判官の舟に乗り当たつて、あはやと目をかけて飛んでかかるに、判官かなはじと思はれけん、長刀脇にかい挟み、味方の舟の二丈ばかりのいたりにけるに、ゆらりと飛び乗り給ひぬ。能登殿は早業や劣られたりけん、やがて続いても飛び給はず。今はかうと思はれければ、太刀、長刀海へ投げ入れ、甲も脱いで捨てられけり。鎧の草摺かなぐり捨て、胴ばかり着て大童になり、大手を広げて立たれたり。およそあたりをはらつてぞ見えたりける。恐ろしなんどもおろかなり。能登殿大音をあげて、

「我と思はん者どもは、寄つて教経に組んで生け捕りにせよ。鎌倉へ下つて、頼朝にあうて、もの一言葉言はんと思ふぞ。寄れや寄れ。」

とのたまへども、寄る者一人もなかりけり。

ここに土佐国の住人、安芸郷を知行しける安芸大領実康が子に、安芸太郎実光とて、三十人が力持つたる大力の剛の者あり。我にちつとも劣らぬ郎等一人、弟の次郎も普通には優れたるしたたか者なり。安芸太郎、能登殿を見奉つて申しけるは、

「いかに猛うましますとも、我ら三人取りついたらんに、たとひ丈十丈の鬼なりとも、などか従へざるべき。」

とて、主従三人小舟に乗つて、能登殿の舟に押し並べ、「えい。」と言ひて乗り移り、甲の鏝をかたづけ、太刀を抜いて、一面に討つてかかる。能登殿ちつとも騒ぎ給はず、真つ先に進んだる安芸太郎が郎等を、裾を合はせて、海へどうど蹴入れ給ふ。続いて寄る安芸太郎を、弓手の脇に取つて挟み、弟の次郎をば馬手の脇にかい挟み、ひと絞め絞めて、

「いざうれ、さらばおのれら死出の山の供せよ。」

とて、生年二十六にて海へつとぞ入り給ふ。

新中納言、

「見るべきほどのことは見つ。今は自害せん。」

とて、めのと子の伊賀平内左衛門家長を召して、

「いかに、約束は違ふまじきか。」

とのたまへば、

「子細にや及び候ふ。」

と、中納言に鎧二領着せ奉り、わが身も鎧二領着て、手を取り組んで海へぞ入りにける。これを見て、侍ども二十余人おくれ奉らじと、手に手を取り組んで、一所に沈みけり。その中に、越中次郎兵衛・上総五郎兵衛・悪七兵衛・飛驒四郎兵衛は、何としてか逃れたりけん、そこをもまた落ちにけり。海上には赤旗、赤印投げ捨て、かなぐり捨てたりければ、竜田川の紅葉葉を嵐の吹き散らしたるがごとし。汀に寄する白波も、薄紅にぞなりにける。主もなきむなしき舟は、潮に引かれ、風に従つて、いづくを指すともなく揺られ行くこそ悲しけれ。

現代語訳

全く（誰一人として）能登守教経の矢の正面に立ちはだかる者はいなかった。（教経は）矢数のある限りを射尽くして、今日を最後とお思いになったのであるうか、赤地の錦の鎧直垂の上に、唐綾緘の鎧を着て、外装を豪華に作った大太刀を抜き、白木の柄の大長刀の鞘をはずし、左右（の手）に持って（敵を）横に払って切り回りなされると、面と向かって相手になる者はいない。（源氏側の）多くの者たちが討たれてしまった。（それを見て）新中納言（知盛）が、使者を遣わして、「能登殿、あんまり罪をお作りなさいますな。そんなことをしたとて（あなたが今相手にしている者は）りっぱな敵というわけではありませんまい。」

とおっしゃったので、（能登殿は）それでは大將軍と組み打ちせよと言うのだなと心得て、大刀・長刀の柄を短めに持って、源氏の舟に乗り移り乗り移りしながら、大声でわめき叫んで攻め戦う。（しかし）判官（義経）の顔を見知っていらっしやらないので、鎧や甲のりっぱな武者を判官かと目をつけて、（舟から舟へと）駆け回る。判官も前から（それを）心得ているので、（能登殿の）正面に立つようには見せかけているが、あれやこれやと行き違うようにして能登殿とはお組みにならない。それでもどうしたことであろうか、（能登殿は）判官の舟にうまく乗り合わせて、それと（判官）目掛けて飛びかかると、判官はかなうまいと思われたのであろうか、長刀を脇に挟み、味方の舟で二丈ほど離れていた舟に、ひらりと飛び乗りなされた。能登殿は早業では（判官に）劣っておられたのだろうか、すぐに続いてもお飛びにならない。（能登殿は）今はもうこれまでとお思いになったので、太刀・長刀を海へ投げ入れ、甲も脱いでお捨てになった。鎧の草摺をかなぐり捨て、胴だけを着てざんばら髪になり、大手を広げて立っておられる。（その姿は）およそ他を圧倒するような威勢で人を寄せつけないように見えた。恐ろしいなどという言葉ではとても言い尽くすことはできない。能登殿は大声をあげて、

「我こそはと思う者どもは、近寄ってこの教経に組んで生け捕りにせよ。鎌倉へ下って、頼朝に会って、一言言おうと思うのだ。寄ってこい寄ってこい。」

さて土佐国の住人で、安芸郷を支配していた安芸大領実康の子に、安芸太郎実光といって、三十人力を持った大力の剛勇の者がいた。自分に少しも劣らない（大力の）家来を一人（連れ）、弟の次郎も人並み優れた豪傑である。（その）安芸太郎が、能登殿を見申し上げて申したことは、

「どんなに勇猛でいらっしやっても、我ら三人が組みついたならば、たとえ身のたけ十丈の鬼であろうとも、どうして屈服させられないことがあるうか（きつと屈服させられるはずだ）。」
と言って、主従三人が小舟に乗って、能登殿の舟に（自分たちの舟を）押し並べて、「えい。」と言って乗り移り、甲の鎧を傾け、太刀を抜いて、（三人で）そろって打ってかかる。（しかし）能登殿は少しもお騒ぎにならず、真っ先に進んだ安芸太郎の家来を、体を近寄せて、海へどつと蹴り入れなされる。続いて寄ってくる安芸太郎を、左手の脇に取って挟み、弟の次郎を右手の脇に挟んで、一絞め絞め上げて、

「さあ、おまえたち、それではおまえたちは死出の山の供をしろ。」
と言って、生年二十六歳で海へさっとお入りになった。

新中納言（知盛）は、

「見届けねばならないようなことは（全て）見届けた。今は自害しよう。」
と言って、めの子の伊賀平内左衛門家長を召して、

「おい、（死ぬ時はいっしょにとこい）約束を違えるつもりはあるまいな。」

とおっしゃると、(家長は)

「あれこれ申すまでもございません。」

と、新中納言に鎧を二領お着せ申し上げ、自分も鎧を二領着て、手を取り組んで海に入ってしまった。これを見て、武士たち二十余人が(主君に)死に後れ申すまいと、手に手を取り組んで、同じ所に沈んだ。(しかし)その中で、越中次郎兵衛・上総五郎兵衛・悪七兵衛・飛驒四郎兵衛は、どのようにして逃れたのだろうか、そこもまた落ち延びてしまった。海上には(平家の)赤旗や、赤印が投げ捨てられ、放り出されていたので、(まるで)竜田川の紅葉の葉を嵐が吹き散らしたようである。波打ち際に打ち寄せる白波も、薄紅になってしまった。主人のいない空っぽの舟は、潮に引かれ、風の吹くのに任せて、どこを指すともなく揺られて行くのは悲しいことであった。

1 内容の整理

□ 次の文章の空欄に、本文・脚注を参考にしながら適切な言葉を入れよ。

○ 最後の戦いに挑む教経「初めく六四・13」

壇の浦の合戦で奮戦する教経に「①」はそれ以上、敵を討ち取ることをやめさせようとする。教経はそれを、「②」をねらえということだと解釈し、「③」を討とうとする。しかし教経にかなわなないと思った「③」は味方の舟に飛び移り、逃げてしまう。そこで教経は覚悟を決めて、刀や鎧甲を海に捨て、自分を「④」にしてみると敵を挑発する。

○ 教経の最期「六四・14く六六・6」

力自慢の武士三人が襲いかかると、教経は一人を海に蹴落とし、二人を両脇に挟んで海に入り、「⑤」への道連れにした。

○ 知盛の最期と合戦の後「六六・7く終わり」

教経の最期を見届けた知盛は、「⑥」の家長とともに、「⑦」を着て海に入り、「⑧」した。合戦後の海上には、平家の「⑨」・赤印が、「⑩」を散らしたように浮かび、平家一門が乗っていた舟がむなく漂っていた。

2 基本

1 次の語句の本文中での意味を書け。

- | | | | |
|-----|------------|---|---|
| (1) | やがて「六四・5」 | 「 | 」 |
| (2) | 召す「六六・9」 | 「 | 」 |
| (3) | おくる「六六・14」 | 「 | 」 |

2 次の傍線部の音便形を、もとの形に直して書け。

- | | | | |
|-----|--------------------|---|---|
| (1) | をめき叫んで攻め戦ふ。「六三・11」 | 「 | 」 |
| (2) | 判官の舟に乗り当たつて「六四・2」 | 「 | 」 |
| (3) | 続いても飛び給はず。「六四・5」 | 「 | 」 |
| (4) | いかに猛うましますとも「六五・4」 | 「 | 」 |

3 次の傍線部の助動詞の文法的意味と活用形を答えよ。

- | | | | | |
|-----|----------------|---|---|---|
| (1) | 最後と思はれけん「六三・2」 | 「 | 」 | 形 |
|-----|----------------|---|---|---|

- (2) 我と思は^ん者どもは〔六四・10〕 〔 〕 形
- (3) 取りついたら^んに〔六五・4〕 〔 〕 形
- (4) おくれ奉ら^じと〔六六・14〕 〔 〕 形

4 次の文を、呼応の副詞に注意して現代語訳せよ。

- (1) いたう罪な作り給ひそ。〔六三・6〕 〔 〕
- (2) などが従へざるべき。〔六五・5〕 〔 〕

3 読解

1 「面を合はする者ぞなき。」「〔六三・4〕とは、どういうことか、答えよ。」 〔 〕

2 「いたう罪な作り給ひそ。さりとてよき敵か。」「〔六三・6〕について、

- (1) 知盛はどういう意味でこのように言ったのか。次の中から適当なものを一つ選べ。
- ア 敗走する敵まで切り捨てるのは人の道に反している。
- イ 負けの決まった戦いで無益な殺生はすべきではない。
- ウ 敵はもう降参しているので討ち取るのはやめておけ。
- エ 人を殺すのは罪なことだが敵であればしかたがない。

(2) 教経はこの言葉をどういう意味に受け取ったのか、説明せよ。 〔 〕

3 「判官も先に心得て…能登殿には組まれず。」「〔六三・14〕は、どのような様子を表しているか。次の中から適当なものを一つ選べ。

- ア 義経のほうに先に教経にねらいを定めた様子。
- イ 義経も教経を討ち取ろうと画策している様子。
- ウ 義経が教経と組み合えずいらだっている様子。
- エ 義経が教経の攻撃を巧みに避けている様子。

4 「飛び乗り給ひぬ。」「〔六四・4〕とあるが、この行動の理由を推測している部分を十五字以内で抜き出せ。(句読点を含まない。)

5 「今はかうと思はれければ」「〔六四・5〕の「かう」にあてはまる言葉を、ここまでの本文中から二字で抜き出せ。

6 「寄る者一人もなかりけり。」「〔六四・13〕とあるが、「寄る者」がいなかったのはなぜか、答えよ。

7 「約束は違ふまじきか。」〔六六・10〕の「約束」とはどのようなものだったと考えられるか、
答えよ。

「

」

8 「そこをもまた落ちにけり。」〔六七・3〕とあるが、「そこ」とはどこのことか、答えよ。

「

」

9 「竜田川の紅葉葉を嵐の吹き散らしたるがごとし。」〔六七・4〕とは、どのような様子をたと
えたものか、答えよ。

「

」

10 この文章から読み取れる、(1)教経と、(2)知盛の人物像として適当なものを、次の中からそれ
ぞれ選べ。

- ア 状況を冷静に見極めて泰然と対処する人物。
- イ 体面を重んじ個人的な感情を顧みない人物。
- ウ 感情のままに行動し自制心がきかない人物。
- エ 自分の務めを忠実に果たす勇猛豪気な人物。
- オ 意志が弱く周囲の状況に流されやすい人物。

(1) 「

」 (2) 「

」